

聖書：ヨシュア記7章1～9節

説教：あなたは何をなさるのですか。

1 敗退

1) 自信があったのに

ヨシュアはイスラエルの民を引き連れて約束の地に入ろうとしています。神はヨルダン川の水をせき止め、無事に渡るようにされ、エリコの城壁を崩し、イスラエルに大きな勝利をお与えになります。このようなことが続きますとだれでもそうですが、少しずつ自信を持つようになります。おそらくヨシュアもそうだったのでしょう。

早速ヨシュアは次の目標を立てます。エリコから東側にそれほど遠くないところにあるアイという町に偵察隊を送らせ、様子を探らせませす。戻ってきた偵察隊はこんな報告をします。「アイは二、三千人もあれば簡単に攻め落とすことができそうです。」日本語に「朝飯前」という言い方があります。ヨシュアはそんな気持ちでアイの攻撃命令を下しました。

2) 逃げ道がない

ところが、結果は思わぬ敗退となってしまいました。逃げる途中で三十六人の犠牲者が出ます。ヨシュアはこれを見たとき、頭をがっつんと殴られたような衝撃を受けました。アイとの戦いに負けたことはもちろん大きなショックですが、もう一つの心配ごとができてしまったのです。8, 9節でこう言っています。「ああ、主よ。イスラエルの敵の前に背を見せた今となっては、何を申し上げることができましょう。カナン人や、この茅野住民がみな、これを聞いて、私たちを攻め囲み、

私たちの名を地から絶ってしまうでしょう。あなたは、あなたの大いなる御名のために何をなさろうとするのですか。」

イスラエルが戦いに負けたと聴き、敵はここぞとばかりイスラエルに攻め込んでくるだろう。ヨシュアは真っ先に最悪の事態を予想します。戦いを指揮するリーダーがいつも考えていることは、万が一のときの逃げ道です。ところが、後ろはヨルダン川があって逃げ道をふさいでいるのです。実はここまで逃げ道がないというぎりぎりの中をなんとかここまで耐え忍んでいたのです。勝っている間は良いのですが、一度でも敵に背中を向けるなら、こちらは追いつめられたネズミのようなもの。ヨシュアは真っ青になります。

3) 原因がわからない

ヨシュアがあわてたのはそればかりではない。最初、アイを攻め落とすことは簡単なこととたかをくくっていました。それなのに敗れてしまいます。敗れた原因がゆいもくわかりません。それがショックなのです。神はいつもヨシュアを励ましていました。「あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。」ところが、神は自分から遠いところにおられるようで不安が募りました。

2 聖絶のものに手を出すな

戦いに敗れた原因について、ヨシュアはこの時点ではまだ知りません。しかし私たちには最初から明らかにされています。1節。「し

かしイスラエルの子らは、聖絶のものことで不信の罪を犯し、ユダ部族のゼラフの子ザブディの子であるカルミの子アカンが、聖絶のものいくらかを取った。そこで、主の怒りはイスラエル人に向かって燃え上がった。」

聖絶とは、汚れた罪を徹底的に滅ぼし尽くす意味で使われる言葉です。このことについて、エリコを攻め落とす前に神がヨシュアを通して厳しく注意を与えていたことを思い出して下さい。6章18節。「ただ、あなたがたは、聖絶のものに手を出すな。聖絶ものにしたため、聖絶のものを取って、イスラエルの宿営を聖絶のものにし、これにわざわざをもたらさないためである。」

後に明らかになることですが、アカンと呼ばれる人物がエリコの町の中から聖絶ものに手を出してしまいました。イスラエルがアイとの戦いに敗れたのは、アカンの罪によるものであると主ははっきりと宣告しました。

3 疑問

1) ひとりの罪はイスラエルの罪

さて皆さんはここを読んで、いろいろな疑問を持ったことでしょうか。今日は三つの疑問を取り上げます。一つ目。罪を犯したのはアカン一人です。ところが1節に何と書いてあるか。「そこで、主の怒りはイスラエル人に向かって燃え上がった。」アカン一人の罪ではなく、イスラエル全体の罪であると言っています。これは为什么呢。アカン一人の違反によって、罪を犯していなかった三十六人のいのちが失われてしまう。これは大きな疑問です。

先日、新聞にこんなことが載っていました。ある会社では、ひとりの人がミスを犯したら

その人が属しているグループ全体がその責任を負うという評価方法をとっているそうです。当然、あまりの厳しさに折角苦労して入社したのに半分の人が会社を辞めていくのだそうです。

聖書の世界もそれと同じなのでしょう。すぐには納得できません。

2) 厳しく見える神の処置

二つ目の疑問。アカンは聖絶のものに手を出しました。具体的には王様が着るような高価なコート、金の延べ棒や銀を自分のふところにしたということです。神の命令に背き、盗んで隠し持っていたのですから、確かにこれは罪です。しかし、そんなことでどうして三十六人もいのちが失われてしまうのでしょうか。さばきが下されるというのならアカン一人でいいはず。アカンにしても、目の前に高価なものが転がっているのを見てしまい、魔が差してつい出来心でやったのだろう。少々大目に見てやったらどうか。盗んだことくらいで人が死んだり、殺されるといのは、神のさばきは、あまりにも厳し過ぎるのではないか。そんな疑問を持ちます。

3) 契約にこだわる神

そもそもこんな厳しいことになったいきさつはどこから始まっているのか。1節に「イスラエルは罪を犯した。彼らは、わたしが彼らに命じたわたしの契約を破った」とあります。神は、ご自分が命じた契約にこだわり続けています。どんどん厳しいことばかり続くのは、神が契約にこだわっているためです。なぜそこまでこだわるのか、わかりません。

4 神の御思い

1) 契約を守る神

いつも言うようですが、厳しいと思えるところにこそ、神の恵みが隠されています。

なぜ神は契約にこだわろうとされるのでしょうか。反対のことを考えてみましょう。もし、神が契約にこだわらない方であったらどうなるか。アブラハムと交わされた契約はどうなるのでしょうか。主が私たちと交わしてくださった新しい契約はどうなるのですか。神が契約にこだわらないというのなら、救いの契約もその程度の扱いになってしまいます。

今日の箇所、神はあまりにも厳しすぎるのではと感じたかもしれません。でも、よく見ると、ここに神の大切な御思いがあることに気がつくのではないですか。神が、アブラハムと交わしてくださった救いの契約は絶対に破られてはならないのです。主が私たちと交わしてくださった十字架による救いの契約は、どんなことがあっても完全に成就されなければならない。神が契約のことを軽く見ているのかそれとも重く見ているのか、そのどちらなのか、今日のところからはっきりと教えられていきます。

2) 人の罪を負われる神

そのことはわかったとして、でもどうして、アカン一人の罪がイスラエル全体の罪だと言われてしまうのでしょうか。

主ご自身のことを考えたいと思います。主は私たちとどのような関係をもってくださいましたか。この方は人とまったく同じ姿になりましたが、罪を犯されませんでした。罪のさばきを受ける必要のない方でした。しかし第一ペテロ 3 章 18 節にこうあります。「キリストも一度罪のために死なれました。

正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のもとに導くためでした。」

「ほかの人の罪は私と関係がない」と言いたい気持ちは私にもあります。しかし、いつまでそこにこだわっているならば、どうして主が十字架で私たちの罪のために死なれたのか、理解することは難しいように思います。それでも納得できないでいる私たちに、神は言ってくれます。「わたしイエス・キリストは、あなたが犯した罪を負います。どうしてそこまでするのか。あなたの罪は、わたしの罪そのものだどうしても感じてしまうのです。あなたの罪はわたしと深い関係があると思えてならないのです。」それが主の御思いです。

3) さばきを引き受けられる主

それでも、神のさばきは厳しすぎるでしょうか。もし神が安全なところに立ってさばきをなさろうとしているのならそのとおりです。しかし、神のひとり子がこの厳しいと思われる罪のさばきを引き受けられたことを思い出していただきたい。

アカンとその家族は石で殺されていきます。アカンのことは他人ごとでしょうか。いいえ、アカンは私たちのことではないですか。本当ならアカンのように死ななければならない私たちです。でも、神は私たちをどんなことをしてでも救おうとされます。そのために、神のひとり子が代わりに死んで下さいました。もうだれもアカンのように死ぬことがあってはならないのです。

ヨシュアは叫びました。「あなたは、あなたの大いなる御名のために何をなさろうとするのですか。」

主ご自身がさばきを受けられました。私たちはどこから救われてきたのか、もう一度思い起こし、その恵みを味わいたいと願います。